

令和5年度 学校評価 学校関係者評価書

学校名	三木市立三木小学校
-----	-----------

1 学校教育目標

自ら学び 心豊かで たくましい子の育成

2 本年度の重点目標

<ul style="list-style-type: none"> ・確かな学力の向上 ・特別支援教育の充実 ・安全・安心な教育環境の整備 	<ul style="list-style-type: none"> ・豊かな心の育成 ・小中一貫教育の推進 ・信頼される学校づくりの推進 	<ul style="list-style-type: none"> ・健やかな体の育成 ・心の通い合う生徒指導の充実 ・あいさつ、返事、掃除、時間の徹底
---	--	--

3 自己評価結果(達成状況)【 A:達成している B:概ね達成している C:あまり達成していない D:達成していない 】

評価の観点	評価項目(取組内容)	取組(達成)の状況	評価	改善の方策
学習指導	・子どもの興味関心意欲を大切に授業づくり	昨年度と同じように算数科を中心に研究を進めている。授業の見通しを強く持たせたり、図や表と説明の行き来をさせたりするなど学習の苦手な児童も話し合いに参加できるように心掛けています。授業の終わりには、本学習の反復問題を出題し教え合いの機会を設けることで協働的な学びにつながるようしています。加えて、学習成果の発表や話し合いのツールとしてタブレットのTeamsやSkymenu等を使うことにより情報共有をやすくし、学習課題を明確にしている。また、PowerPointなどを活用し、学習の成果を異学年に発表する場も設定している。さらに、Qubenaの導入をうけて、算数科を中心にタブレット端末を使用した個別最適な学習を進め、理解できる児童は自分のレベルに合わせて学習を進め、理解が遅い児童には、教師がフォローに回るできるようになっている。	A	本年度研究している「苦手な児童に寄り添う学習」の研究をさらに進め、児童が積極的に活動できる授業を行い、学習意欲を高めていく。また、その中で「話す」ことだけでなく、「聞く」姿勢を大切に、クラス全体で学んでいこうとする姿勢を醸成していく。より効果的なタブレット端末を使った授業の展開に向け、新しいアプリも積極的に取り入れ有効な活用方法を探っていく。また、話すことが苦手な児童も増えてきているので、朝の時間を使っておこなっているスピーチをより効果的に行えるよう工夫していく。
	・落ち着いた学習環境づくりや言語環境の整備	朝の学習時間では、昨年と同様に20分間設定し、基礎基本の学習に取り組んでいる。朝から落ち着いて学習に取り組むことで、1時間目の授業にスムーズに入れるよう配慮している。また、「話を聞く」目標を設定し児童がお互いの話をしっかりと聞き、だれもが認められる学習の場設定にとりこんでいる。さらに、読書の推進としては毎月、図書館から「わくわく図書館BOX」の借り入れを行い、児童が新たな本の世界に出会う機会を増やし、読書の推進にも努めている。放課後週1回1時間程度、基礎学力の定着を目的として、高学年の希望者に算数「がんばり学びタイム」を実施している。指導者と学級担任とが密に連携をし、個々に応じた課題を設定することにより、児童も達成感をもって学習に取り組んでいる。	B	本年度、「話を聞く」目標を新たに設定したが、今後も継続し友だちの話を聞くことや相手に伝える話し方のモデルを示すことで、お互いに友だちの意見を聞き合い学び合う集団を醸成していく。タブレットを使った学習においては、各場面において明確な目標を提示し、プリント学習との併用も適宜行っていく。さらに、給食後の読書の時間など、どの児童も積極的に読書に取り組めるよう声掛けを継続していく。また、休み時間や放課後の時間を使って、個々の児童に応じた学習支援に引き続き取り組んでいく。今年度と同様に、特別支援教育指導補助員や日本語指導支援員など各教職員と担任が密に情報共有し、児童の困り感に寄り添うきめ細やかな指導を行っていく。
	・学習習慣を徹底し、基礎・基本の学力の定着	高学年では教科担任制を取り入れ、算数では、常に複数で指導するなど児童の困り感に寄り添える体制を取っている。授業の終わりには、本学習の反復問題を出題し、児童が習ったことを使って自己解決する機会を設定することで、自分の考えを言語化し、「深い学び」となるよう心がけている。朝の学習時間では、学習の基盤となる認知能力を高めるため「コグトレ」を実施し、その後プリント学習に取り組んでいる。螺旋的に何度も同じ問題に触れることで基礎基本の定着を図っている。また、授業においては適宜、Qubenaを取り入れることで、学習でわかりづらかったことを復習したり質問できる環境を整えている。また、外国語は専科教員が、ALTと協力しながら、既習の学習を活用した会話練習もたくさん取り入れている。ジョリーフォニックスも4年目に入り児童も発音とスペルの関連性を意識しながら取り組めるようになってきている。さらに、ハロウィンなどの外国の行事にも積極的に取り入れ、学校全体で楽しむなど英語を身近に感じる環境が整ってきている。	B	朝の学習については、学習内容を継続させていく。その際、めあてを明確にし、児童にも意識させながら取り組んでいきたい。ICT機器やデジタルドリルなどより効果的に活用できるよう、各教員の実践を持ちより交流することによって、授業の質を高めていきたい。外国語に関しては、専科の教員の授業を積極的に参観することで小学校の英語で求められているものを理解し、様々な学習場面で適宜導入し、児童が英語に触れられる場面を設けるようにしていく。コロナ禍も落ち着き、本年度からハロウィンイベントなど英語を使った活動も再開でき、より外国語を身近に感じてもらえるような活動を一年を通して企画していきたい。
生活指導	・基本的な生活習慣の確立と規範意識の育成	今年度も感染症対策を根本におきながら生活指導を行った。その中で、換気、手洗い等は学校生活を送る中で定着している。家庭訪問の際に「三木小っ子のきまり」を家庭に直接配布し、説明を行った。家庭でも、きまりを正しく理解してもらい、学校と家庭が連携して、児童に周知徹底できるように取り組んだ。 挨拶については、児童会のあいさつ運動を継続して行った。6年生だけでなく3～5年生にも挨拶を呼びかける側として参加させたり、良い挨拶ができた児童を全校生に紹介したり等、児童が主体的に挨拶に取り組めるよう工夫した。その結果、昨年度と比べると学校内では自分から挨拶をする児童が増えた。しかし、地域の方への挨拶が少ない等、課題がある。	B	感染症対策については、コロナ渦で身につけた習慣を活かし、手洗いの徹底を中心に来年度も継続して取り組む。 挨拶については、今年度の取組を継続して行うことで、主体的に挨拶に取り組めるよう工夫を行う。また、挨拶の必要性、重要性を1年間通して意識させるため、児童会と連携し、代表委員会などを活用して挨拶を啓発していく。継続して取り組むことで定着を目指す。

4 自己評価方法の適切さについての学校関係者評価

自己評価方法は適切である。

児童、保護者、教職員の3者にアンケート調査を実施し、その結果に基づいて総合的に評価が行われている。

5 評価の観点ごとの学校関係者評価

<p>学校自己評価結果及び改善の方策の適切さについての評価</p> <p>評価は概ね妥当である。</p> <p>○学習指導 落ち着いて学習に取り組める環境づくりができているのは良いことである。 タブレットを使用した授業展開が積極的に行われているのと同時に、「わくわく図書館BOX」や「話す聞く」学習など、タブレットばかりに頼らない多様な学習が展開されていることは望ましい。 外国語学習については、英語を身近に感じ、楽しめる学習・環境ができつつあるようだ。英語嫌いな児童が増えないように、楽しいイベント等も引き続き取り組んでいただきたい。</p> <p>○生活指導 児童会の挨拶運動など、学校内では進んで活動が行われており、児童も学校内ではよく挨拶ができている。しかしそれ以外で挨拶が少ないのは、家庭内での挨拶が少ないからだと思われる。また、地域の方への挨拶は、知っている人ならできるが知らない人にはできないのかもしれない。保護者・地域も一体となって挨拶を推進していくためには、学校から保護者に働きかけられると理想である。</p>
--

心の教育 (道徳教育・人権教育)	・道徳の時間の充実と実践化	他教科や本校の教育活動に合わせたカリキュラムの改善を行い、日々の学習活動に活かした。教材研究を行うと同時に評価についても研鑽を積んだ。	A	高学年になるにつれて自尊心が下がってきているので、自尊心を高めるような学習の進め方や指導方法などの研鑽を積んでいく。児童の実態に応じた授業づくりを進め、児童の内面に迫る授業づくりを行っていく。	○心の教育 児童会の取組である「友情の木」は、自主的で良い取組である。友達やクラスの良い所を紙に書き、それを見える形で掲示したり放送で紹介したりすることで、周りの人たちのことを認め合うクラスづくりや学校づくりに役立っている。友達の良さや自分の良さを認めるこのような活動は自己肯定感の向上につながると思われる。 アンケート結果で、数年下がり続けていた「お子さんの良い所が言える。」や昨年度評価の低かった「命の大切さや人に対する思いやりについて、家で話している。」の保護者評価が上がったのは、そのような学校での取組が家庭に見えて、それが家庭でも反映されたのではないかと。
	・自尊感情を高める人権教育の推進	親子人権学習は今年度も昨年に引き続き、親と子がワークシートで交流を図る形をとった。低学年では、自分の名前の由来や自分がどれだけ愛情を持って育てられてきたことを親からの手紙を通して知り、自分が大切にされている実感を持った児童が多かった。また、児童会役員が放送で紹介する「友だちの良いところ」は、今年度は「友情の木」として児童の昇降口に掲示し、一枚ずつ葉が増えることによって全学年で自尊感情が高められる取組を行った。	B	友だちから良いところを見つけてもらったり、異学年交流や日々の授業の中で友だちから温かい言葉をかけてもらえる機会が少しずつ増えてきたことにより、自分の良いところを認められる児童が増えてきた。今後も自己肯定感を高められるような授業実践、異学年交流等を行っていく。	
	・一人一人が活かされる温かい学級・学校づくり	日々の授業の中でお互い教え合うことを大切に授業を展開している。お互いに交流することで話し合ったり、付箋に書いて友だちへの思いを表現するなどの取組を多く取り入れている。異学年交流では、一緒に休み時間に遊んだ後、高学年は下の学年への思いやりが育まれ、低学年は上の学年に感謝できる気持ちが芽生えるなど、思いやりを持ち、相手のことを考える機会が増えた。	A	昨年度と比べて友だちや誰かのために自分から進んで行動できると答えた児童が随分と増えてきている。クラスの中で、学校全体の中で、集団の中で自分が他者の中で認められているという達成感や思いやりの気持ちを継続していけるよう、引き続き学級経営や、異学年交流など積極的に取り組んでいきたい。	
特別支援教育	・児童の内面理解に基づいた支援	教育支援委員会を月1回開催し、配慮や支援を要する児童についての情報共有と指導法を検討している。配慮が必要な児童について情報交換を行い共通理解を図ったことで、全教職員で指導をすることができた。また、家庭やSC、SSW等、関係機関と連携しながら全教職員で配慮や支援が必要な児童の共通理解を図り、児童への適切な関わりができるように努めた。 今年度は、学校行事やグループ学習等の活動が積極的に実施されるようになったことで、児童の活躍場面や友だちとの交流が増えた。その結果として、児童にも保護者にも学校が楽しい場所であるという肯定的な意見の占める割合が高まった。	B	配慮や支援を必要とする児童について、継続して家庭や関係機関と密に連携し、情報共有していく。そして、全教職員の共通理解のもと、児童への指導や支援を充実させていく。一人一人の児童が活躍できたり、互いを認め合うことができたりできる学習活動が計画的に実施できるよう、教育活動の充実を図っていく。	○特別支援教育 「学校に行って活動するのが楽しい。」の項目において、児童の評価が少し下がっている。つまり楽しくないと思っている児童が一定数いるということである。教師間の児童の情報共有や指導法は定期的に行われているようなので、引き続き連携を密に取ることで、学校での活動を楽しんでいる児童や不登校児童への理解が更に進み、少しでも児童が楽しく活動できるようになることを期待する。不登校児童に対しては、オンライン授業などの方法を提示し、クラスと繋がる手段を多く用意できるとよい。 保護者との情報共有や児童との向き合い方については、配慮いただいていると思われる。今後も引き続き願いたい。
	・共に育つ特別支援教育の充実	特別支援学級担任と交流学級担任が時間割についての打ち合わせを行い、特別支援学級の児童が交流できる授業内容を検討している。 特別支援教育自主研修を適宜行い、全ての学級で活用できるような指導法、児童の実態把握に関する研修を行った。職員間で意見交換を図り、支援方法についての知識向上に努めている。 居留地校交流を行い、特別支援学校との交流及び共同学習を計画実施し、共に活動することで学び合うことができた。	B	来年度も引き続き今年度の取組を継続、実施していく。障がいの有無にかかわらず、児童一人一人に寄り添い個性を尊重した教育活動や指導ができるよう研修を深めていく。	
安全教育	・安全指導や防災教育の充実	学期ごとにあらゆる場面を想定し、避難訓練を実施した。学校全体で防災意識がより高まるように事前にクラスで学習を行った。定期的な取り組みとしては、各地区の危険個所確認や月に1度の安全点検、地区児童会を通して通学路での安全指導等を行った。	B	児童が主体性を育んでいけるような防災教育を目指していく。今年度の避難訓練で、課題に挙げた部分については、児童、教職員ともに防災や防犯等、安全に対する意識を高めていく。	○安全教育 避難訓練で、授業中・休み時間など様々な場面を設定したり、予告なしで実施したりすると、児童が自ら考えて行動できるので、良い取組である。
保護者・地域との連携	・ふるさと学習の推進	地域のボランティアによる読み聞かせ(全学年)や花植え(1年生)に加え、町探検・稲刈り体験(2年生)、味噌づくり体験(3年生)、金物体験(4年生)、田植え・稲刈り体験(5年生)、三木合戦や神話等の講話(6年生)などの活動を通して、児童の豊かな感性やふるさと三木を愛する心の育成を行った。	A	保護者・地域の方々との連携を大切にし、生活科や総合的な学習の時間などを通して、「ふるさと三木」について学ぶ機会を設け、ふるさとを愛する心の育成に努める。地域の教育力を有効に活用するために、これまでの体験学習を継続して進めると共に、新規の人材開拓にも努め、教育活動の充実を一層図っていく。	○保護者・地域との連携 月1回の学年通信、年250回のHPの更新は十分な数だが、保護者は通信の頻度が少ないと感じている。それは保護者が、児童の活動写真など見て分かるものを求めているからと思われる。ただ先生も忙しいだろう。学年通信と学校通信を一つにまとめたり、学年通信の頻度を減らすことで学級通信を出したりするなど、現状の負担を変えずに児童の様子を伝える手立てを構築してもらいたい。
	・通信・ホームページの充実	学習や学校生活での様々な活動場面や学校行事への取り組みの様子等を伝えるため、学校だよりや学年通信、学級通信の発行、Webページの更新に努めた。	B	学校行事やオープンスクール、授業参観日を通して、保護者や地域の方々に教育活動を公開するとともに、日々の児童の様子や教育活動等を積極的に学校だよりや学年通信、ホームページの更新により情報を発信し、地域に開かれた信頼される学校づくりを推進していく。	
小中一貫教育	・9年間のカリキュラム素案の作成	9年間カリキュラム作成について、小中一貫担当同士が集まり、研修で話し合いをした。カリキュラムは今後、中学校を中心に作っていく予定。	B	中学校を意識して日々の学習を見直していく。宿題の出し方やテストの持ち方など、スムーズに中学校へ移行できるよう考えたい。	○小中一貫教育 9年間でこういう児童を育てたい、というゴール地点の目標をまず明確にするとよいのではないかと。その上で、その目標を達成するために小・中それぞれどうするとよいのかを考える必要がある。小中の交流研修会では、教科の交流だけでなく、児童理解に対しての交流も多く持つ方がよい。
	・教職員や児童生徒の積極的な交流活動などの推進	三木東中学校区の中学校教員と小学校教員が集まり、教科毎に各学校の児童の様子、指導内容について情報交換を行った。小中交流研修は、小学校教員が中学校に行ったり、その反対に中学校教員が小学校に来て授業を行ったりした。	C	内容を吟味し、具体的に小中の教職員情報交流を年間を通じてやっていけるよう考えたい。	